弘前大学教育学部紀要　第126号：143～151（2021年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 126：143～151（Oct. 2021）

令和２年度版小学校検定教科書の語彙的分析
―British National Corpus との比較から―

Analysis of the Vocabulary of Authorized English Textbooks for Elementary School English:
Comparison with the British National Corpus

佐藤　　剛*・石神　　響**・古川　　遼**
Tsuyoshi SATO*・Hibiki ISHIGAMI**・Ryo KOGAWA**
佐藤　ゆき**・竹谷もも香**・丹藤　慧也**
Yuki SATO**・Momoka TAKEYA**・Keiya TANDO**

要　旨

本稿は，小学校外国語の主たる教材である検定教科書とオーセンティックな英語データである British National Corpus（BNC）の話し言葉コーパスを語彙の頻度の観点から比較することで，小学生用の検定教科書に出現する語彙の特性を分析することおよび小学校外国語授業における望ましい語彙指導の在り方を模索するものである。そのため，コンコーダンサー AntConc（Version 3.5.9）（Anthony，2020）の Keyword List 機能を使用し，特徴的高頻度語と低頻度語を，名詞，動詞，形容詞別に抽出し分析を行った。その結果，小学生用の検定教科書には，スポーツ，教科や行事などの身近な事柄に関する名詞や want や play など様々な題材で広く使用することができる動詞や，jump や dance など具体的な動作を表す動詞やポジティブな意味の形容詞が特徴的に高頻度で用いられていることが明らかになった。

キーワード：語彙指導　小学校英語教育　コーパス　教科書分析

１．はじめに

2020（令和２）年度からの新学習指導要領（文部科学省，2017）の全面実施により，日本の英語教育は大きな変革期を迎えている。小中高が連携した英語の指導を通して各学校段階の学びを接続させることや，テストのための知識ではなく外国語を使って何ができるようになるかの明確化，指導語彙数の増加など様々な変更点の中，特に重要な変更点として小学校５・６年での外国語が教科化されたことが挙げられる。これにより，小学校５・６年生を対象にした外国語の授業では，検定教科書を使用した指導が行われている。

Kirchhoff（2012）によると，外国語としての英語を指導する目的のひとつは，外国人とのコミュニケーションのスキルや知識を発展させていくことであるのに対し，実際の教育現場の指導では，学習者が実際にそのような機会を得ることは少なく，入試やテストのために英語を勉強するようになり，本来の英語教育の目的を見失いつつあると述べている。このように，受験や成績などの結果のための勉強ではなく，英語教育本来の目的である英語によるコミュニケーションのための知識とスキルを養うことを達成するための方法のひとつは，授業内でオーセンティックな英語に触れる機会を増やしていくことが挙げられると考えられる。

また，Valvona & Yoneda（2019）は，外国語授業内で，オーセンティックな教材を使用する利点として，学習者の言語理解への足場かけを促すこと，コミュニケーション能力を向上させること，動機づけを

＊　弘前大学教育学部
Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University
＊＊弘前大学教育学部学校教育教員養成課程
Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

促すこと，本当の言語を教えることや学ぶことの可能性につながること，新しい文化への窓となることがあると結論づけている。このように，外国語の授業におけるオーセンティックな教材の活用は，英語学習者に対して多くの学習的効果をもたらすと考えられる。

しかし，限られた時間での教材研究の中で，教員自身が新しく導入された教科書に現れる英文のオーセンティシティを判断し，授業に反映させていくことは容易ではない。現在使用されている検定教科書と，実際に英語圏で話されているオーセンティックな英語表現を比較し，その中で教科書内に出現する英文と英語圏で実際に使われているオーセンティックな言語データとを語彙的な側面から比較することによって，実際の授業場面において教科書を使用する際にその語彙や表現のオーセンティシティを示すことができれば，授業内で使用すべき語彙や表現を選択したり，補助教材の必要性の有無などを判断する際の有益な資料となることが期待される。

そこで，本研究では，学習指導要領の改定に伴い，新たに小学校の外国語の授業で使用される検定教科書に用いられる語と，実際に英語圏で使用されているオーセンティックな英語を語彙的な側面から比較することを目的として，日本の小学校外国語検定教科書に見られる特徴的高頻度語および特徴的低頻度語としてどのようなものがあるのかを品詞別に分析する。

2　先行研究

教科書など授業で使用される教材を語彙の面から分析する研究はこれまでも多く行われてきた。長谷川他（2008）は，2000年代の学習指導要領に基づく，中・高の英語検定教科書語彙で可能となる実用性のレベルを，1980年代の教科書語彙と比較し，その変化を複数の調査を通じて明らかにした。その結果は以下に示す通りであった。

(1)　1980年代と2000年代で採択数最上位の中学校教科書は，学習指導要領に示された新語数の減少を反映し，異語数とともに延べ語数も減少した。

(2)　1980年代と2000年代で，上級レベルの高等学校教科書で，学習指導要領に示された新語数の減少を反映し，異語数が減少したものがあるが，異語数が増加した教科書もあった。

(3)　高等学校教科書の延べ語数は，調査対象とした５種全てで減少し，教科書内で英語に触れる分量が減少していた。

(4)　中学校教科書と高等学校教科書で学習できる総異語数は，調査対象の５種の高等学校教科書で比較した場合，2000年代で1980年代より減少したものがあるが増加したものもあった。

(5)　中学校では採択数最上位の教科書を使用した後，高等学校でどの教科書を使用するかによって，学習できる語彙数が，1980年代と2000年代でともに，最大800語前後の差が生じた。

(6)　中学校と高等学校の英語検定教科書語彙の実用性は，調査した音声英語の７種の言語活動に対し，英語が理解できる閾値と考えられる95％のカバー率が達成できたのは，1988年度と2006年度では，１つだけであった。

(7)　文字英語の７種の言語活動に対して，95％のカバー率が達成できた教科書はなく，「生活案内」が最下位であったことから，生活語彙の不足が日本の英語検定教科書語彙の弱点であると考えられた。

小林（2013）は，平成25年度検定済教科書中学校４社12冊，高等学校４社13冊，計25冊の口語表現のオーセンティシティを検証した。分析方法としては，「縮小」「拡張」「変換」の３つの枠組みからなる，口語英文法（CEG）フレームワークを談話分析ツールとして使用した。結果として，枠組みの中に50ある項目のうち，実験で使用した教科書全てにおいて24だけしか項目を満たしていなかった。このことから，日本の中高生は，実際に使用されているオーセンティックな英語の形態のうち半分ほども学習機会がないということが判明し，中高生の英語教科書に対してより一層，実用性とオーセンティシティを導入すべきであるという結論に至った。本研究では，2020年度の学習指導要領の改定に伴い，小学校で新たに導入された検定教科書のオーセンティシティを，実際に英語圏で使用されている英語と比較することによって，日本の小学校英語教科書に見られる特徴語でどのようなものがあるのか分析していく。

内田（2014）は海事英語読解能力の効果的な学習のためにAntConcを用いて海事情報誌のコーパス分析を行い，書き言葉の海事英語を構成する語彙特徴を明らかにした。そしてその特徴が高校段階までで学習する一般英語とどのように類似し，また異なるのかをBritish National Corpus（BNC）と比較し，高頻度語に限定して調査を行っている。その結果，高頻度の単語100語を知っていれば語彙カバー率は51.66％にのぼり，海事英語テキストに出現する半分の語は理解

することができることを示唆している。また，一般英語と海事英語共に，言語の基盤を成す機能語の使われ方は類似していたものの，伝えたい内容の中身を構成する内容語の高頻度語の種類には大きな違いが見られた。一般英語では主に中学までで学ぶ語が頻度の上位を占めるのに対し，少数だが大学生・社会人レベルに必要な語も見られた。さらに，海事英語の内容語のテキスト内での使われ方も特有で，海事英語テキストの内容を理解するための語彙として，高校レベルにプラスアルファの知識が必要とされることを示唆している。

小学生用の教材を分析対象とした先行研究として，西垣他（2007）は，中学校英語検定教科書を出版する７社のうち５社から出版された小学校英語テキストおよび指導書に出現した異語数2,703語，延べ語数85,078語の語彙のうち，４社以上のテキストシリーズに出現した語彙を抽出して得られた514語を小学校基礎語彙として，中高英語教科書の語彙と比較した。その結果は以下の通りである。

(1)　生き物（life and living things）と食料（food, drink, and farming）が小学校英語の語彙を強く特徴付けている。
(2)　抽象語と思考関連の語は中学校と高校の語彙を強く特徴付けている。
(3)　小学校で多く扱われる語の分析では名詞が多かったが，中高に特徴的な下位領域の語彙には動詞，形容詞，副詞が多い。

現行の学習指導要領（文部科学省，2017）における小学校外国語の授業では，「読むこと」や「書くこと」の指導が開始されたといっても「聞くこと」および「話すこと」などを中心とした音声言語による指導がメインである。そこで，本研究では比較するオーセンティックな言語データのコーパスとしてBNCの話し言葉コーパスを使用する。BNCは，１億語の英語テキストからなるイギリス英語のコーパスであり，現代英語の特徴を映し出すことを目的として構築されたものである。１億語のうち9,000万語が書き言葉，1,000万語が話し言葉であり，日常生活で言葉を使う様々な場面を想定して言語データを収集している。話し言葉コーパスの活用について，山崎（2015）は英語の話し言葉コーパスを英語教育に応用する様々な方法や問題点を模索し，特に会話の自然発生的，相互行為的な言語減少への意識を高める教材として話し言葉コーパスが持つ可能性を探った。その結果，話し言葉コーパスを未編集で用いることで，現実の会話の音声を聞かせられることと，動的な会話のやりとりに対して学習者に気づきをもたらし，言語学習への動機づけを与える上に，書き言葉のように文法的に完全に「正しい」文を発せねばならないというプレッシャーから学習者を解放することの２つが利点として挙げられた。話し言葉への意識を高める意味では，母語である日本語の会話コーパスを併用することによっても，英語の相互行為的言語減少をより実感につなげることができ，生の会話をじっくりと観察することは現実世界では不可能に近いがコーパスを用いれば可能であり，教室内での利用方法に大きな可能性があることを示唆した。

３　リサーチクエスチョン

本研究は，小学校外国語科において使用されている検定教科書とBNCの話し言葉コーパスを特徴語という観点から比較することによってネイティブスピーカーが使用する英語と小学校で指導される英語の差を検討し，小学校における語彙指導のあり方を語彙のオーセンティシティという側面から考察をするものである。そのため，以下の３つのリサーチクエスチョン（RQs）を設定した。

RQ１　小学校において使用されている検定教科書に出現する動詞とBNC話し言葉コーパスに出現する動詞ではそれぞれ低頻度語・高頻度語においてどのような特徴や差異がみられるか
RQ２　小学校において使用されている検定教科書に出現する名詞とBNC話し言葉コーパスに出現する名詞ではそれぞれ低頻度語・高頻度語においてどのような特徴や差異がみられるか
RQ３　小学校において使用されている検定教科書に出現する形容詞とBNC話し言葉コーパスに出現する形容詞ではそれぞれ低頻度語・高頻度語においてどのような特徴や差異がみられるか

４　研究方法

４．１　分析対象とした教材

本研究で分析の対象とする教材は，小学校で使用されている*Blue Sky elementary 5*，*Blue Sky elementary 6*（啓林館），*CROWN Jr. 5*，*CROWN Jr. 6*（三省堂），

Here We Go! 5，*Here We Go! 6*（光村図書），*Junior Sunshine 5*，*Junior Sunshine 6*（開隆堂），*JUNIOR TOTAL ENGLISH 1*，*JUNIOR TOTAL ENGLISH 2*（学校図書），*NEW HORIZON Elementary English Course 5*，*NEW HORIZON Elementary English Course 6*（東京書籍），*ONE WORLD Smiles 5*，*ONE WORLD Smiles 6*（教育出版）である。児童用の本文，挿絵に書かれている英文・単語，巻末の単語リストを分析対象とした。

４．２　調査手続き

調査手続きについては，上記４．１に示した小学校の外国語授業で使用されている，検定教科書をテキストファイル（.txt）の形式でデータ化した。より妥当な結果を得ることを目的として，各データに，以下のようなスクリーニング作業を行った。

(1)　名詞の複数形などの派生形は単数形として分析する。
(2)　一般動詞の過去形の規則変化形，主語が三人称単数の際にｓまたはesが付いた形，現在分詞形などの派生形は原形として分析する。ただしswimmingやreadingなど名詞化してしまっているものは，異なる語として分析する。
(3)　人名は分析対象から削除する。

その結果，以下の表１に示すコーパスデータを得た。

表１
小学生用の検定教科書コーパスの基本データ

Type（異なり語数）	2, 416語
Token（総語数）	27, 868語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	. 088

４．３　データ分析

データ分析に当たっては，コンコーダンサーAntConc（Version 3.5.9）（Anthony，2020）のKeyword List機能を使用し，上記表１に示す小学生用の検定教科書コーパスとBNC話し言葉コーパスとを比較することで以下のような分析を行った。Keyword List機能とは，２つのコーパスを比較し一方に頻度面で特徴的な語を対数尤度比で示される特徴語指数（Keyness）で返すものである。

まず，RQ１の為の手立てとして，小学生用の検定教科書コーパスとBNC話し言葉コーパスを比較し小学生用の検定教科書の特徴的高頻度動詞・低頻度動詞上位10語を抽出し，それぞれの特徴を比較・検討する。次に，RQ２の為の手立てとして，小学生用の検定教科書コーパスとBNC話し言葉コーパスを比較し小学生用の検定教科書の特徴的高頻度名詞・低頻度動詞名詞10語を抽出し，それぞれの特徴を比較・検討した。最後に，RQ３の為の手立てとして，小学生用の検定教科書コーパスとBNC話し言葉コーパスを比較し小学生用の検定教科書の特徴的高頻度形容詞・低頻度形容詞上位10語を抽出し，それぞれの特徴を比較・検討した。

５　結果と考察

上記の研究手法に示す通り，コンコーダンサーAntConc（Version 3.5.9）（Anthony，2020）を使用し，BNCの話し言葉コーパスと比較して，小学生用の英語検定教科書において特徴的に高頻度で出現する語彙および特徴的に低頻度で出現する語彙を，名詞，動詞，形容詞それぞれ品詞別に抽出したものを以下に示す。

５．１　特徴的高頻度名詞

以下の表２は特徴的高頻度名詞を示したものである。それによると上位10語には，スポーツの名前（soccer，baseball，volleyball），教科（math，science，Japanese），行事（festival），誕生日（birthday），単位（yen），施設（zoo）が見られた。

表２
特徴的高頻度名詞

Rank	Frequency	Keyness	Word
3	141	+ 1370.95	soccer
6	101	+ 816.85	festival
7	79	+ 786.4	math
10	75	+ 733.62	baseball
12	56	+ 575.62	yen
14	56	+ 546.27	volleyball
15	78	+ 536.73	science
16	68	+ 514.04	Japanese
17	77	+ 513.53	birthday
18	53	+ 506.05	zoo

上の表２から，主にスポーツの名前が上位10語の中で多く現れていることが分かる。これらは，できることを尋ねたり答えたりする際のI can play ～，Can you play ～？や，好きなものを尋ねたり答えたりす

るI like ～，Do you like ～？のような小学校の英語の授業で多く用いられる表現のあとに続くことが多いため，上位に現れたと考えられる。さらにスポーツ名の後ろにgame（s），player，team，stadium，uniformのような語彙がつく場合もあり，watch，He（She）is a ～，go to，have，buyのような表現の後ろにも多く現れると考えられる。また，スポーツ名の中でも，soccerやbaseballが上位にある理由としては，日本において人気のあるスポーツであるため，特徴的に高頻度で現れていると考えられる。加えてsoccerは，ここで現れている他のスポーツと違い，ボールを表す際にa soccer ballと表現するため，My treasure is ～やI want ～の表現にも使われていたため，使用頻度が高くなったと考えられる。

次に，教科の名前が現れた理由としては多くの検定教科書において時間割を尋ねたり答えたりする場面や，好きな教科を尋ねたり答えたりする単元があるため，have，like，studyのような動詞の後に続く形で用いられることが多く，さらに時間割は主要５教科が多く割り当てられることがあるため，技能教科よりも特徴的に現れていると考えられる。以上が，math，science，Japaneseは上位10語に現れた原因であると考えられる。

行事に関する語であるfestivalは，その頻度においてsoccerに次いで２番目である。これは多くの検定教科書の単元としての四季折々の祭り（spring，summer，fall，winter）や，日本の祭り（gion，bon，star），学校行事（school，music，sport）などを扱うものが多いことに起因すると考えられる。

誕生日（birthday）は，月，日，曜日，日付のレッスンで多く使用される。そこで使用されるWhen is your birthday?，My birthday is ～の表現を使って，教科書によって様々なパターンが考えられるため特徴的に高頻度で現れている。また，What do you want for your birthday? のような表現においても使用されており，誕生日プレゼントを答える際にも使用が見られた。

単位（yen）はオーセンティックな英語ではなかなか用いられない語である。しかし，小学生用の検定教科書に特徴的に現れている理由としては，教科書には買い物やレストランでのやり取りを扱う単元で食べ物などの値段が～ yenと表記されているためであると考えられる。また，小学校にとって外国の通貨の単位はなかなか理解するのが難しいことも，日本円（yen）が特徴的に現れていると考えられる。

最後に施設（zoo）は，街にある施設や建物を紹介する際に”We have ～のような表現で多く現れていた。さらに，教科書では多くの動物の名前も登場するため，I went to the zoo. I saw ～のように使用されることが多い。また，動物園は子どもに人気のある施設であるため，I want to go to the zoo. のようにwant toの表現で使われたことから，特徴的に高頻度で現れたと考えられる。

５．２　特徴的低頻度名詞

以下の表３は特徴的低頻度名詞を示したものである。それによると上位10語には，数字（one, two）や数量を表すもの（lot, bit）など連語として用いられる名詞が目立った。

表３
特徴的低頻度名詞

Rank	Frequency	Keyness	Word
927	4	-105.6	people
929	41	-102.55	one
945	34	-50.91	right
947	2	-48.94	lot
951	1	-41.96	bit
952	4	-41.89	back
953	4	-41.26	things
956	31	-37.12	two
970	4	-28.84	year
978	1	-22.45	end

上の表３からオーセンティックな話し言葉と比較して特徴的に使用頻度が低い名詞として，数字や数量を表すものが多いことがわかる。a bit of や a lot of のような連語の形で数量を表す際に使用されるbitやlotはlittleやmanyなど１語で同様の意味を示すものが使用されることが多いため特徴的低頻度語として抽出されているのではないかと考察する。また，特徴的低頻度として抽出された語彙の多くは，副詞や接続詞が多く，表３に示す名詞として抽出された上位10語は927～978とそのランクが低く，表２の特徴的高頻度名詞と比較しても，その特徴語指数（Keyness）も高くない。この事から，今回分析の対象とした小学生用の英語検定教科書のテキストデータはオーセンティックな話し方コーパスと比較して，特徴的に低頻度な名詞に大きな差はないということができる。

BNCの話し言葉コーパスのデータと比較して最も特徴的な低頻度語としてpeopleが抽出された理由としては，教科書は児童が理解しやすいようにpeople

という抽象的な単語ではなく，具体的な人物名などが多く用いられるためでないかと考える。

以上の結果から，小学校段階では具体的に児童がイメージしやすい名詞が多く使われているのではないかと考える。もちろん，小学校段階では，具体性をもって児童が外国語に慣れ親しむ必要はあるが，中学校からは，ある程度抽象的な，イメージしにくい部分も指導していく必要があると考える。そのためにも，小学校では，授業時間の中で児童が外国語を使う場面を多くすることで，小学校から中学校への学習内容の移行をスムーズにすることが可能になるのではないかと考えた。

５．３　特徴的高頻度動詞

以下の表４は特徴的高頻度動詞を示したものである。それによると，want や play など，教室英語でもよく使われている動詞が BNC 話し言葉コーパスと比較してみても，高頻度で出現していることが分かる。他にも，jump や dance など，実際にジェスチャーを使って示すことができるような具体的行動を示すことができる動詞が抽出されている。これらは日本でもカタカナ語として意味が通じる外来語であることも，特徴的高頻度語として抽出された原因であろう。

表４
特徴的高頻度動詞

Rank	Frequency	Keyness	Word
4	381	+1093.67	want
5	179	+938.53	play
8	114	+742.56	eat
9	114	+737.75	enjoy
22	54	+439.96	swim
26	55	+385.87	cook
31	51	+351	sing
40	49	+334.23	jump
45	267	+314.05	like
48	42	+289.1	dance

全体的に get や take など複合して様々な意味になる動詞や，複数の意味を持つ動詞が少なく，jump や sing など，具体的な動作を表す動詞が特徴的高頻度語として現れるという結果になった。

それぞれの特徴語高頻度動詞のコンコーダンスラインを分析する。まず，want については，他の動詞よりもその頻度381と非常に高いことがわかる。このことは，want という動詞が持つ「～が欲しい」という意味が小学校における様々なコミュニケーション活動において，意味のやりとりの場面で使いやすく，多く使用されているのではないかと考察する。さらに，コンコーダンスラインを見ていくと want to ～「～をしたい」という使い方が最も多く用いられていた。どの教科書においても，将来の夢や行きたい国，中学校で入りたい部活やクラブ活動に関する単元があり，その中で「～に行きたい」「～になりたい」という自分の夢や希望を相手に伝える活動が授業内でのコミュニケーションにおいてよく使われるためであると考える。

次に，play ついては，その後に目的語として使用される名詞は，soccer や baseball などといったスポーツ名が大半を占めていた。教科書の単元のテーマでも，自己紹介や身の回りの人の紹介，オリンピックやパラリンピックが題材として使われることが多く，その中で play ＋スポーツという形が多用されていることがわかる。他にも，guitar や piano などといった楽器名も多く見られた。これらのことから考察すると，授業内でコミュニケーションをする際に，他者に自分の趣味や好きなことを伝えるたりすることが多いことが，play が特徴的高頻度語として抽出された原因であると考える。

続いて，enjoy と like を見ていく。意味はそれぞれ，「～を楽しむ」「～を好む」であり，普段のコミュニケーションについて考えても，日常的に多く使用されることが想定される動詞である。コンコーダンスラインについても見ていくと，like は料理名，スポーツ名，enjoy は hiking などの趣味や snow festival などのイベント名が挙げられた。このことからも，非常に馴染みやすく，汎用性の高く単元や題材を問わずいろいろな場面で使用されている動詞として用いられていることがわかる。

最後に swim，jump，dance は，どれも具体的な体の動きを表す動詞である。言い換えれば初級外国語学習者に適しているとされる全身反応法で用いることができる動詞である。英語を学んで間もない小学生に対して，教員自身がジェスチャーを使って示したり，絵カードにて表示したりすることができることから，これらの動詞は頻度が高く，児童が比較的容易に理解しやすい動詞として小学生用の検定教科書に多く用いられているのではないかと考える。

５．４　特徴的低頻度動詞

以下の表５は特徴的低頻度動詞を示したものである。それによると know，think，had，been，say，was，has，work が特徴的な低頻度動詞として抽出された。

表５
特徴的低頻度動詞

Rank	Frequency	Keyness	Word
956	3	-215.74	know
959	7	-173.66	think
966	2	-125.57	had
971	1	-111.74	been
973	2	-105.81	say
974	79	-103.83	was
979	1	-93.66	has
989	2	-50.82	work

上記の動詞が特徴的な低頻度語として抽出されたことは，小学校の英語の授業で扱われる文型と大きな関りがあるのではないかと考えられる。know，think，say などは，that 節を伴って使用される動詞であるが，小学校の英語の授業は短文での発話が主であり，このような複雑な英文を扱うことは少ない。コンコーダンスラインを分析すると小学生用検定教科書において know，think，say は I think so. や I know him. のように定型句として使用されていることが分かる。また，小学校の英語の授業では，過去形は went，ate，saw などの限定された不規則変化を中心に扱い，規則変化の過去形や主語が三人称単数の際に動詞に s（es）をつけることなど派生形は扱わないこととなっている。オーセンティックな英語では一般動詞としてだけでなく，完了形や使役動詞などとしても高頻度な語彙である had や has が特徴的な低頻度語として抽出されているのは，これに起因するものであろう。

最後に，was は，その頻度が79と表５に見られる他の動詞と比較して非常に多いことが分かる。これは，オーセンティックな英語では was は非常に高頻度な動詞として使用されていることを示している。補語を伴った形だけではなく，進行形や受動態など多くの文型で使用されるものである。

以上から小学校では限られた動詞を用いて単文レベルの英文を主に扱っていることが語彙の面から伺える。このような小学校での学習を受けて，中学校や高校では，接続詞を用いた重文や複文などの複雑な文や，様々な時制や態の文を学習することへと発展していくという小中連携の形が見えてくる。

５．５　特徴的高頻度形容詞

以下の表６は特徴的高頻度形容詞を示したものである。それによると，小学校の外国語活動及び外国語科で使用される検定教科書においては，favorite, delicious，fun，beautiful，famous, cute，exciting, cool，sour，snowy が BNC の話し言葉コーパスと比べて高頻度で出現しており，これはデータ全体のバランスの中で特徴的に多く使用されていることを示す。

コンコーダンスラインを参照すると，favorite は memory，place，sports，subject を多く修飾している。これは自分の好きなものについて述べたり，相手の好きなものを尋ねる際に使用されていることが分かる。そして，delicious は食べ物を（cakes, desserts など）表す名詞を修飾している。これは食事の感想を述べる際や相手に食べ物を紹介する際に使用されていることが分かる。また，beautiful は芸術や景観（art, beaches など）を修飾している。これは自分が見たものについて述べる際に使用されている。そして，famous については地名（Kusatsu, Lakehamano など）や職業（pianist, baseball player など）を修飾しており，その土地の有名なものを紹介するときや人物を紹介する際に使用されている。cute は人や物を修飾する語として多く使用されている。exciting については，体験について（My summer vacation/I play soccer last Sunday など）を修飾する語として使用されている。He/she is cool のように cool については人を修飾する際に使用されている。sour については食べ物を修飾する語として紹介されている。snowy は天気を表す語の一つとして sunny や rainy，cloudy とともに紹介されている。コンコーダンスラインを参照すると，紹介したい出来事があったときの天気の様子を伝えるために使用されていることが分かった。

表６
特徴的高頻度形容詞

Rank	Frequency	Keyness	Word
23	40	+411.13	favorite
27	38	+381.28	delicious
52	48	+282.57	fun
83	40	+209.45	beautiful
161	26	+143.85	famous
189	15	+129.1	cute
196	24	+126.41	exciting
213	18	+119.16	cool
254	11	+101.91	sour
334	8	+72.23	snowy

上の表６から，小学校において使用される英語の検定教科書は自分の好きなもの・体験したこと・食に関することについて紹介する際に使用する形容詞がBNCの話し言葉コーパスと比べて高頻度で出現していることが分かる。前述の通り小学校においては動詞の派生形を伴うため三人称単数を主語にした英文を扱うことが少ない。よって，IやYouを用いて自分の身近なことについて相手に伝える，また相手に尋ねることが多くなる。よって，好きなもの・体験したこと・食に関することを伝える際に良く用いられる形容詞が多いと考えられる。また，内田（2014）において紹介されているBNCにおける高頻度トップ100の単語の中に形容詞はlastとotherの２つしか見られず，小学校において使用される検定済み英語教科書ではfavorite，delicious，fun，beautifulの４つが上位100語に入っており，BNC話し言葉コーパスよりも多く形容詞が高い頻度で使用されていることが分かる。これから小学校の外国語の授業では自分のことを伝える・相手のことを尋ねる表現が多くなることが予想されるため，自分の気持ちを豊かに表現し伝え合うために様々な形容詞が扱われていると考えられる。Hoshino（2020）は2020年から小学校の外国語の授業で使用される検定教科書の語彙を共通語（range）とその特性の観点から分析を行った。その結果，多くの教科書に多く見られる語彙のひとつとしてポジティブな意味の形容詞や副詞などが挙げられるとしており，本研究の結果と一致するものである。

５．６　特徴的低頻度形容詞

以下の表７は特徴的低頻度形容詞を示したものである。それによると，all，some，other，same，different，ownが上位に出現しており，これらの単語はBNC話し言葉コーパスと比較して教科書の使用頻度が特徴的に少ないということを表している。

表７
特徴的低頻度形容詞

Rank	Frequency	Keyness	Word
930	24	-85.96	all
937	6	-65.67	some
938	3	-64.01	other
959	1	-30.84	same
973	1	-21.89	different
982	1	-19.74	own

上の表７から，主に程度や数を表す形容詞（all，some）が上位６語の中で多く出現していることが分かる。名詞にsをつけるという複数形についての明示的な指導は小学生にとって複雑であるため，中学校以降に行われていることが，これらの単語が特徴的な低頻度形容詞として抽出された理由として考えられる。中学校で初めて複数形の概念が体系的に指導されるため，その繋がりを考慮したうえで，小学校では外国語活動の中でチャンツなどを通して児童に体験的に理解させていくべきだと考えられる。

また，same，differentは２つ以上の事柄を比較する状況下で初めて使用できる単語である。小学生の英語の授業では，特徴的高頻度形容詞の結果からも読み取れるように，It’s delicious.やIt’s fun.などというようにひとつの事柄の特徴を伝える活動が多い。２つ以上のものを比較して特徴を述べたりすることは，小学生にとっては複雑で困難であるため，教科書における使用頻度が少ないと考えられる。

また，特徴的低頻度形容詞１位のallは，Keynessが-85.96で，特徴的低頻度の単語全体の順位で見ても24位と低いことが分かる。特徴的低頻度の単語全体の順位において１位である代名詞thatのKeynessが-893.2であることからも分かるように，低頻度形容詞は他の品詞と比べると，比較的特徴的でないと言える。

６　まとめと教育的示唆

本研究は，教科としての指導が行われている小学校の外国語の授業において主たる教材として使用されている令和２年度版検定教科書の語彙を，名詞・動詞・形容詞の品詞別の使用頻度を，オーセンティックな英語データであるBNCの話し言葉コーパスデータと比較することによって，小学校の英語授業における語彙指導に役立つ示唆を模索した。まず，名詞については，スポーツの名前，教科名，行事を表す名詞，誕生日，単位，施設が特徴的な高頻度語として抽出された一方，数字や数量を表すもの，連語として用いられる名詞が特徴的な低頻度語として抽出された。

動詞については，wantやplayなど，単元の内容に関わらず広く使用することができる汎用性の高いものや，教室英語でもよく使われている動詞やjumpやdanceなど，実際にジェスチャーを使って示しことができるような具体的行動を示すことができる動詞が特徴的高頻度語として抽出されている。一方で，know，think，sayなど，that節を伴って複文で多く使用さ

れる動詞 had や has などオーセンティックな英語では様々な文型で使用される have の派生形が特徴的な低頻度語として抽出された。

形容詞については favorite，delicious，fun，beautiful，famous，cute，exciting，cool，など，ポジティブな意味をもつものが特徴的高頻度語として，反対に程度や数を表すものや，複数の事柄を比較する際に使われるものが特徴的な低頻度語として抽出された。

以上のことから，スポーツ，教科や行事などの身近な事柄に関する語彙と want や play など限られた動詞やポジティブな意味の形容詞を使用して，単文など比較的単純で短い英文で表現していることが小学生用の検定教科書の英文の特徴であると考えることができる。さらに特徴的低頻度語の分析から，名詞の単数形や複数形，動詞の過去形や過去分詞形などの単語の派生形や，接続詞を用いた複文についてなど小学校では体系的に扱われないものを，中学校や高校では指導するという小中連携の在り方が示唆された。これからの研究の方向性としては，2021年度より使用されている中学生用の英語検定教科書をデータソースとしてコーパスを構築し，小学生用教科書コーパスおよびオーセンティックな言語データと比較することによって，本研究の結果を発展させていきたい。

参考文献

内田洋子（2014）.「AntConc を用いた海事英語テキストの語彙分析」『東京海洋大学研究報告』第11巻，88-95.

小林敏彦（2013）.「平成25年度検定済新英語教科書の向後表現のオーセンティシティ検証と５つの緊急提言」『小樽商科大学人文研究』第126巻，155-200.

佐藤　剛（2018）「小学生のための受容語彙リストの開発」『JES Journal』第18巻，36-51.

西垣　知佳子・中條　清美・西岡　菜穂子（2017）.「小学校英語テキスト出現語彙の意味領域による分析」『日本児童英語教育学会研究紀要』第26巻，15-25.

長谷川修治・中條清美・西垣知佳子（2008）.「中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証」『日本大学生産工学部研究報告Ｂ（文系）』第41巻，49-56.

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』.

山崎のぞみ（2015）.「英語の話し言葉コーパスの教育的応用：会話の相互行為的言語現象に着目して」『研究論集』第101，21-39

Anthony, L. (2020). AntConc (Version 3.5.9) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from https://www.laurenceanthony.net/software

Cheryl Kirchhoff (2013). Tasks for Authentic English Communication. Journal of Nagano Prefectural College, 67, 79-84

Hoshino, Y. (2020). Vocabulary Range and Characteristics of Words Appearing in Elementary School English Textbooks in Japan. ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan, 31, 49-63. https://doi.org/10.20581/arele.31.0_49

Valvona Christopher, Yoneda Mitaka (2019), Authentic Materials in Language Learning: Definitions, Advantages and Disadvantages, and Future Directions of Study. Okinawa Christian University Review, 16, 1-10.

（2021. ８.27受理）